

この境内は広く一對の狛犬（明治十五年十月天草市石工、橋口茂一）道祖命（明治十三年二月一日寄付者、芹田利平）首なし地藏（天保十三年寄進十名）献燈（二基明治三十六年九月吉日）手洗鉢（石垣式一辻忠六〔演年〕辻武一郎）の外幟立竿石（二基）等がある。珍しいのは明治三十八年戦役（日露戦争）に従軍記念の砲弾の塔があり出征した二十五名の従軍者の氏名が刻まれてある。更に広々とした境内には樹齢二五〇年と推定される見事な藤の大樹がある。この古木は本県の名木として指定を受けており、その他にも櫨けやき三本・どんぐり一本等これらも相当の古木で空高く生い茂っている。これらの古木と大樹は、朝な夕なこの宮に参詣する人々をして、自ら神霊のお加護に頭を垂れさせるに充分である。



観世音菩薩

## 一七 中 飯 盛

中飯盛は東与賀町では北西部の一番端に位置し、北は佐賀市本庄町上飯盛に西は西与賀町元相応に境し、南は下飯盛と相接している。現在の世帯数は五五、その半数が農業に従事し、公務員・サービスマン・建設業・運輸通信

その他卸小売等と終戦後の職種が大分変化している。

この中飯盛の由来について、古老の古川茂士（元東与賀村の助役）の談話を記述したい。

昔、有明海の干拓事業の際に、飯場（飯を炊いて多くの人夫に食べさせる場所＝飯を盛る所）が三カ所次々にできた。その第一番目の飯場という意味で上飯盛＝佐賀市本庄町、次の場所を中飯盛、三番目を下飯盛＝と呼ぶようになった由。この中飯盛・下飯盛と大野を併せて大字飯盛と称するようになったので、大野にもこの飯場があったとの説も残っている。この村落内の悟真寺は、山号を飯盛山と呼ばれるのもここに起因するものである。

### 伝説「辻城」の由来

中飯盛の南部の端に「辻城」＝と呼ばれる地所がある。いつの頃かは不明だが「辻栄助」の一族が住んでいた。この栄助じいさんは正直者の上に仲々の働き手で、毎晩毎晩この村落四五戸の周りを火の用心の拍子木をかちかちと鳴らし回ったのである。その謝礼として毎月の一日に各戸から白米を少しずつ集めて贈ったらしい。もともと栄助じいさんの家業は、竹皮草履や下駄の鼻緒作りであったが、よく売れて前記古老等幼少の頃は買いに行かされたと述懐する。その栄助じいさんの子に「吉次」という少年がいたが、大変な秀才で当時この村の「学友会」の世話をしたりみんなの面倒を見てくれて今でも忘れられないという。ところが何時とはなく栄助さん一家は佐賀市に転住され、相当に活躍しているとのことである。つまり「辻」という地主の家跡で、その屋敷の東北の隅に塔の形の墓石が残っている。この屋敷を中心に耕作田地を「辻城」と呼ばれているが、今日ではA氏の住宅が建っている。



昭和11年中飯盛託児所

まず生産組合の活動であるが、活動の拠点には旧公民館であった。この旧公民館は昭和二十八年の大水害後に、当時の佐賀県立佐賀中学校の剣道場を払い下げて貰い、移転し改造築したものである。この旧公民館を諸行事や生活改善の外生産組合活動に活用し活用した。戦時中における農繁期の託児所や共同炊事（当時佐賀県で最初）や、戦後いち早く公営結婚を創始して本村における生活改善ののろしを上げて実行にも踏み切ったのである。このことは明治四十年の頃、本村でも他に先がけて既に実行組合を組織し、現在の農協の元祖を

「梅左工門橋」の由来

この中飯盛の中央を東西に流れるクリーク（小堀）に、この小邑を南北に二分するような格好で「梅左工門橋」がかかっている。昔はひっそりしたものの淋しい場所であった。この橋はその昔「太田梅左工門」という大地主がいて自分の名前をいつまでも記念に残すために作った橋である。その「梅左工門」が今日ではなままって「梅よん橋」と呼ばれているのである。今頃の若い人たちはこの橋名も余り知らないが、五〇歳以上の老人はこの名称で呼んでいる。橋の北部から東へかけて、当時の橋の主梅左工門所有の水田が広がっていた。しかし、いつの間にか五、六人で耕作されるようになり、また戦後の農地改革で現在はM氏の所有となっており、人間一生の浮沈消長の姿がまざまざと物語っている。

中飯盛天満宮

この村では南部に天満宮を祀り、北部には悟真寺があつて人々は敬神崇祖の念が旺盛である。天満宮の祭神は菅原道真公。ご神体が二体あるので村落の人の談話によると、昔上飯盛の方からも分身して祀られたらしく、それで二体のご神体となったそうである。祠は本町内でも珍しく全部が石造りで、明治三十五年に再建されている。当時の石工は、三里村の深川良吉・福地愛吉・中村友吉の三名で、鳥居は慶応三年の建立で石工は筒井茂七の作となっている。この宮の境内にもいろいろ合祀されているが、珍しいのが八天狗さんである。年代が不明で残念だが、成富三右衛門外六名の名前が見られる。庚申さんは寛文十三年の建立であるので、約三二〇年前のもの。

もう一つの石像はお地藏さんとも見られ、当時免田をもった者の寄進らしく、施主松永孫十外九名の姓名が彫られてある。その外にも二十三夜さんの塔なども祀られていて、村人の信仰心の厚いことが象徴されている。

なおこの境内に二つ三つの力石があつた。これは往時の若者連中が農閑期の暇を利用して集まり、この石を抱えたり肩に担いだりした、力だめし用の石塊である。他の村の宮境内にもこの力石があつたが、現在では余り見当たらない。こうした環境に恵まれた中飯盛は産業や教育方面についても東与賀村でも先進地であつた。特に生産組合や婦人会活動等の実践記録も残されていて、よき伝統は今日も脈々と引き継がれている。

作っていたからである。

また地域における子供・学童の教育にも意を用い、当時の小学校男児を集めて悟真寺で「学友会」を始めた。その他大人はもちろん青年層・婦人会・少年たちに至るまで、浮立・七福神・川神祭り・荒神祭・ほんげんぎょう・初午等伝統的で楽しい諸行事を励行してきた。これらの美しい村の行事も時代の変遷に伴ってほとんど姿を消したが、最近になってこの村に「浮立」が見事に復活された。この村のは天衝舞浮立の伝統を踏むものであるが、徳久弘を中心に村の長老・先輩等が指導者となり農閑期を利用して練習と花笠や衣装作りが每晚続けられた。昭和五十七年五月前町長故碓辻次郎の胸像除幕式が役場の広場で挙行されたが、これを祝福して初めて公開され、華麗壮麗な浮立の舞が晴れた五月の空の下で脚光を浴びたのである。

## 一八 下 飯 盛

下飯盛は中飯盛の直ぐ南部に隣接しており、その下に位置することから「下飯盛」の地名が生まれたものと思われる。南北に長い集落であるが、その中央に八幡神社を祀り北部に開田庵、南部に龍田寺と地藏院の三カ寺を擁して昔より民家も相当に多かつたのである。

慶長絵図によれば下飯盛は、佐賀平野の南限集落として、「二千三十七石九斗二合」とある。この飯盛は現在の佐賀市本庄町の上飯盛と見られ、戦国時代の開拓地であろう。下飯盛は上飯盛の直ぐ南部に在るところから、上

飯盛からの移住によってできた干拓村で、正保絵図に「下飯盛村」と見える。万延元年（一八六〇年）の郷村帳には、中飯盛村の小字として「大屋舗小路・江副小路・辻小路」とあり、下飯盛村の小字には「長八小路・石丸小路・山田小路・道手小路」と記されている。

佐賀県の歴史では、七〇八〇年前はこの辺一帯は海だったらしく、飯盛から北部を小津郷という海岸であったとのことである。佐賀郡誌の一節に次のような記事が載っている。

「上飯盛は字の如く、上飯を盛るという意義にて中古時代は飯盛以南は一面筑紫瀉なりしが、現今の東与賀即ち大野・住吉・新村の海面埋築の際は、新地方の役所を置き飯の炊出方を為し、之を盛りて公役へ配付せしと云う現今の与賀高等小学校の敷地となり」とあるように、お上のご飯を盛ったことから名がついたという。上飯盛の下に村ができたのを下飯盛といい、その中間を中飯盛と呼ばれたと思われる。

ある資料で当村落内の寺院の創立を調べたら、龍田寺の創建は今を去る約五一〇年前、文明二年（一四七〇年）に梅屋和尚を開山として始められ、開田庵の建立は享保二年（一七一七年）となっているから今から約二七〇年前、佐賀龍泰寺の高弟峰月圓澄和尚を法地開山としたとある。当時この開田庵の一帯は瀉地で満潮の時は漁舟が入りしたが、後には土地を住民が開いて田畑を作り庵を建立し「開田庵」と名付けたとあること等から、この辺一帯は自然埋没や干拓などによってでき上がったことが証明される。